

花と緑で人々に笑顔

震災は、人々に物質面の苦しみを与えただけでなく、心にも暗い影を落とした。笑うことを忘れてしまった人に笑顔を取り戻してもらいたい。そう願って仮設住宅に足を運び、自分の仕事であるガーデニングを通して、被災地の方々に寄り添い続ける人がいた。そして、その輪は今も広がっている。

1 避難所に届いたプランター

花と緑による復興支援。杜の都仙台にふさわしく、花と緑で街をいろど彩り、被災地の方々の心を癒していこうという活動をしている人たちがいる。

その中心となっているのが、仙台市に住む園芸研究家の鎌田秀夫さんだ。鎌田さんは、ガーデニングのプロである。



避難所で花の植えつけをする皆さん

きっかけは、ライフラインも少しずつ復旧し、人々の生活も落ち着いてきた平成24年4月、鎌田さんも関わっていた園芸誌のカメラマンが「花で支援をしたい。」と来仙したことだった。その頃、避難所ではお年寄りがすることもなくじっとしていた。とりあえず水も電気も使え、食べ物の心配はなくなったけれど、ただ避難所にいるしかなかったのだ。そこに届いたプランターと土と花。落ち込んでいたお年寄りたちの表情が輝き出した。体を動かし、花を見て、みんなが笑顔になる…。その光景に、鎌田さんは胸を打たれた。

写真は、当時避難所だった六郷中学校でプランターに花の苗の植え付けをしたときの様子である。鎌田さんが設立した「花と緑の力で3.11プロジェクトみやぎ委員会」のボランティアメンバーが、避難所のみなさんと花を植えている。花を贈る、というだけでなく、一緒に楽しみながらコミュニケーションを図るのが、鎌田さんたちのスタイルだ。

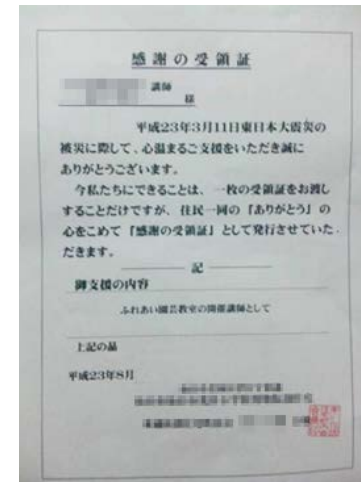
「花はいいよね。」

「震災がなければ、今頃は家の庭にも花が咲いてたなあ。」

震災前を思い出し、時には涙を流しながら花を植えることもある。でも、作業が終わった後は、みんな笑顔になる。支援する人もされる人も、共に笑い合っている。

2 感謝の受領証

ある避難所でのこと。いつものように花を植えた後、ありがとうの言葉とともに、鎌田さんたちは一枚の紙を受け取った。それには「感謝の受領証」という見出しが付けられ、「今私たちができることは、一枚の受領証をお渡しすることだけですが、被災地の住民一同『ありがとう』の心を込めて『感謝の受領証』として発行させていただきます。」と書いてあった。支援内容は「品物」と「心の活動支援」。自治会長さんの印も押されてある。それはたった一枚の紙だ。でもその一枚につまっている思いは大きなものだった。感動のあまり、震える手でその「思い」を受け取った鎌田さん。感動は、次の意欲につながっていった。



実際に受け取った受領証

鎌田さんの心の中には、いつしか大きな夢が芽生えていた。それは、「復興の森」だ。流された森を再生し、「となりのトトロ」に出てくるような森を作りたい！自分が今まで仕事の中で培ってきた力を、仕事だけではなく、多くの人の笑顔のために、地域のために、使っていけたなら…。夢を現実にするために、鎌田さんは今、積極的に動いている。何年かかる計画だ。でも、鎌田さんには信念がある。細く長くやり続けること。そして、一生懸命にやること。この信念に基づき、鎌田さんたちボランティアのメンバーは、支援の物語を紡いでいる。



活動の前にあいさつをする鎌田さん

? 考えよう

- 「することもなくじっとしていたお年寄り」はどのような気持ちで毎日過ごしていたのだろうか。
- 「感謝の受領証」に込められた感謝の「思い」とは、どのようなものなのだろうか。